

来ず選択的動脈刺激静脈サンプリングが有効であったインスリノーマの1例. 第59回日本糖尿病学会年次学術集会. 京都, 5月.

- 18) 林 毅, 松浦祐香, 徳久照朗, 藤原久美, 小口愛子, 浅野 裕, 大和 梓, 山城健二, 平井利明, 坂本昌也, 東條克能, 宇都宮一典. HPV ワクチン接種後に慢性疲労を主症状とし, 視床下部障害が疑われた症例に対する内分泌学的検討. 第89回日本内分泌学会学術総会. 京都, 4月.
- 19) 大村有加, 藤本 啓, 廣津貴夫, 浅野 裕, 坂本敬子, 東條克能, 宇都宮一典. インスリノーマにおけるインタクト・プロインスリンと選択的動脈内刺激薬注入 (SACI) 試験の有効性に関する検討. 第59回日本糖尿病学会年次学術集会. 京都, 5月.
- 20) Sawano S, Nishimura R, Takahashi H, Sudo H, Mitsuishi S, Tsujino D, Ando K, Utsunomiya K. Exploring ideal time points for predicting glucose fluctuations in type 1 diabetics receiving insulin degludec: a continuous glucose monitoring study. 52nd Annual Meeting of the European Association for the Study of Diabetes (EASD 2016). Munich, Sept.

IV. 著 書

- 1) 東條克能. 14. 内分泌の疾患 14-2. 視床下部・下垂体
1) 発生・形態, 2) 視床下部・下垂体連関, 3) 下垂体前葉ホルモン. 内科学. 第11版. 矢崎義雄 (国際医療福祉大) 総編集. 東京: 朝倉書店, 2017. p.1523-9.

V. その他

- 1) Tsutsui K, Nemoto M. A case of beriberi with leg edema, pleural effusion, and anemia. Ann Clin Case Rep 2016; 1: 1067.
- 2) Tsutsui K, Nemoto M. A case report of fibromyalgia. Ann Clin Case Rep 2016; 1: 1176.
- 3) 森武美帆, 川浪大治, 山城健二, 須藤英訓, 嘉納麻耶, 三石純江, 原興一郎, 坂本昌也, 西村理明, 宇都宮一典. 卵管癌に対してニボルマブ投与後に劇症1型糖尿病を発症した1症例. 第54回日本糖尿病学会関東甲信越地方会. 横浜, 1月.
- 4) 浅野 裕. 日光暴露の不足によって低カルシウム血症を呈した男性の1例. 日本内科学会第624回関東地方会. 東京, 6月.
- 5) 鈴木里佳子, 高橋 紘, 好川有希子, 鈴木博史, 森豊, 宇都宮一典. リラグルチドにミチグリニド/ボグリボース配合剤を追加投与した際の血糖日内変動. 第54回日本糖尿病学会関東甲信越地方会. 横浜, 1月.

腫瘍・血液内科

教授: 相羽 恵介	臨床腫瘍学, がん薬物療法
教授: 薄井 紀子	血液腫瘍学, がん薬物療法
准教授: 島田 貴	血液内科学
准教授: 土橋 信明	血液腫瘍学, がん薬物療法
准教授: 矢野 真吾	血液内科学
講師: 増岡 秀一	血液内科学
講師: 西脇 嘉一	血液腫瘍学, 造血幹細胞移植学
講師: 矢萩 裕一	血液腫瘍学
講師: 小笠原洋治	血液内科学
講師: 杉山 勝紀	血液腫瘍学
講師: 齋藤 健	血液腫瘍学, 造血幹細胞移植学
講師: 塩田 祐子	血液腫瘍学, がん薬物療法
講師: 南 次郎	血液腫瘍学, 造血幹細胞移植学
講師: 荒川 泰弘	臨床腫瘍学, がん薬物療法
講師: 大場 理恵	血液腫瘍学, 造血幹細胞移植学

教育・研究概要

腫瘍・血液内科では, 良性血液疾患, 造血器悪性腫瘍, 固形がんを三つの柱として幅広い診療を行っている。悪性腫瘍の制圧は私たちに課された最優先課題の一つであり, 造血器悪性腫瘍に対する化学療法と造血幹細胞移植療法, 固形がんに対する集学的治療に力を注いでいる。そのため, エビデンスに基づいた標準治療から最新の治療まで, 患者さんの病態に応じた最適な医療を提供できるように努めている。そのため質の高い全国規模の臨床研究に特に力を入れている。学生教育においては臨床実習での教育を重視しており, 実際のベッドサイドで患者さんから医学を学ぶよう配慮している。卒後研修医・レジデントに対しては, 医局会や学会で症例報告の機会を与え, プレゼンテーション能力の育成に努めている。

I. 急性白血球の臨床研究

日本成人白血病治療共同研究グループ (Japan Adult Leukemia Study Group: JALSG) に参加し, 多施設共同で質の高い臨床研究を行っている。特に急性骨髄性白血病 (AML) の症例登録数は全国で3番と, 当科での臨床の activity の高さを示している。

1. AML

AMLの予後因子としては染色体核型、遺伝子異常、年齢、初発時白血球数、3系統の形態異常などがあげられるが、重要な予後因子は染色体核型と遺伝子異常である。予後良好なAMLは化学療法または分化誘導療法により、5年生存率は60%に得られるが、予後中間群と不良群はHLA一致の血縁者ドナーがいる場合は同種造血幹細胞移植が推奨されている。当科では適切な医療を提供するため、正確に予後分析を行い、最適な多剤併用化学療法を施行している。治療は防護環境病棟で行い、必要に応じて同種造血幹細胞移植療法を取り入れている。多施設共同臨床試験としては、JALSG AML209GWS(成人急性骨髄性白血病の発症・進展および治療反応性、副作用に関する遺伝子異常の網羅的解析)の臨床試験に参加している。

2. 急性リンパ性白血病(ALL)

ALLは、複数の遺伝子の異常が多段階的に集積することが発症の原因と考えられている。予後因子として、年齢、初診時白血球数、染色体核型、寛解到達までの期間などが報告されている。ALLはAMLと比べて予後が不良のため、多施設共同臨床試験に参加し、よく議論して立案された多剤併用化学療法を実施している。また適応症例に対しては同種造血幹細胞移植療法を行っている。

再発性のALLに対しては、JALSG RR-ALL214(再発および難治の成人急性リンパ芽球性白血病に対するクロファラビン、エトポシド、シクロホスファミド併用化学療法の第I/II相試験)に登録をして治療を行っている。なお当科はJALSG RR-ALL214の研究事務局を担当している。

II. 慢性骨髄性白血病(CML)の臨床研究

CMLは、9番染色体と22番染色体の相互転座によって生じるフィラデルフィア染色体上でc-abl遺伝子とbcr遺伝子が融合し、BCR/ABLキメラ蛋白が産生される。BCR/ABLは強いチロシンキナーゼ活性によって増殖シグナルを促進し、これがCML発症の原因と考えられている。CMLに対する初期治療は、特異的チロシンキナーゼ阻害薬のイマチニブ、ニロチニブまたはダサチニブを投与している。治療効果はEuropean Leukemia Netの基準に準じて判定し、細胞遺伝学的効果と分子遺伝学的効果を評価している。最適な治療効果が得られない場合は、薬剤の変更が必要となる。チロシンキナーゼ阻害薬の登場により同種造血幹細胞移植は第一選択の治療ではなくなったが、チロシンキナーゼ阻害薬に耐性

を示す遺伝子変異を認める場合、急性転化を来した場合は、同種造血幹細胞移植療法が必要となる。

CMLにおける今後の課題は、チロシンキナーゼ阻害薬の投与の中止が可能となる患者群を臨床研究で想定していくことである。JALSGではJALSG D-STOP216 study(初発時よりダサチニブが投与され分子遺伝学的完全寛解を2年間以上維持した慢性期の成人慢性骨髄性白血病症例に対する薬剤中止試験)が行われており、当科もこの臨床試験に参加している。

III. 造血幹細胞移植の臨床研究

当院における造血細胞移植は、小児科が1982年に開始し、内科は1989年から施行している。近年当科での移植件数は年間50件を超えるようになり、2016年度は52件であった。原疾患や患者さんの全身状態に合わせて、自家末梢幹細胞移植併用大量化学療法、同種造血幹細胞移植、臍帯血移植、骨髄非破壊的前処置による同種移植、HLA半合致移植の中から最適な移植医療を選択している。

日本造血細胞移植学会認定の造血細胞移植認定医が中心となって、関東造血幹細胞移植共同研究グループや厚労科研造血細胞移植合同班会議に参加し、多施設臨床研究に積極的に取り組んでいる。また同種造血細胞移植後フォローアップのための看護師研修会を受講した看護師が同種造血細胞移植後フォローアップ外来を担当し、医師と一緒に同種移植を受けた患者さんの外来管理を行っている。

現在進行中の多施設共同臨床試験は、KSGCT1301(難治性濾胞性リンパ腫に対するbendamustineを併用した前処置による同種造血幹細胞移植療法の安全性と有効性の検討)、KSGCT1501(同種造血幹細胞移植後アザシチジン維持療法の用量探索試験多施設共同臨床試験)、KSGCT1502(シクロホスファミド、フルダラビン併用の静注ブスルファン製剤を用いた移植前治療でのivBuの薬物動態の比較検討)などである。

IV. 固形がんの臨床研究

2012年4月に地域がん診療拠点病院の指定を受け、「腫瘍センター」として、がん診療に従事している。膵臓がん、胆道がん、胆管がん、食道がん、胃がん、大腸がん、乳がんを対象とし、各臓器疾患別に診療カンファレンスを定期的開催し、より適切な治療を討議している。

日本臨床腫瘍学会のがん薬物療法専門医を7名が取得しており、最適で安全な化学療法を実践してい

る。固形がんの診療は外来通院治療を基本としており、快適に治療を受けていただくために、医師・看護師・薬剤師が中心となって機能向上を図っている。また適応症例には「患者手帳」を携帯していただき、副作用の管理を配慮した当科独自の先進的外来化学療法システムを施行している。

1. 食道がん

消化管外科、放射線治療部と共同して、第二世代の DOC+CDDP+5FU+RT の第Ⅱ相研究を開始した。薬剤耐性・感受性探索のため、遺伝子発現も併せた研究である。高リスク症例には、化学放射線療法として low dose FP 療法を施行した。また副作用として CDDP の腎障害を L-FABP 測定による有用性の検討を開始した。現在、遺伝子解析による食道がん化学療法の有効性および副作用予測に関する臨床研究を実施している。

2. 胃がん

実地医療として S-1+CDDP 療法を再発進行例に行った。サルベージ療法としてパクリタキセル (PAC) 単独療法を施行した。HER2 陽性胃癌に対しては、XP+HER (Xeloda+CDDP+Herceptin) を施行した。また nab-paclitaxel も臨床導入され、paclitaxel を凌駕する治療係数の向上が期待されている。

3. 大腸がん

多施設共同研究として、オキサリプラチン、ベバシズマブ既治療進行再発大腸がんに対する 2 次治療ベバシズマブ併用 FOLFIRI 療法におけるベバシズマブ至適投与量の第Ⅲ相ランダム化比較試験を 2010 年 9 月から、また当院外科との共同研究である EGFR 陽性、K-RAS wild type 進行・再発大腸がん症例に対する一次治療としての SOX-cetuximab 併用療法の検討 (臨床第Ⅱ相試験) を開始している。サルベージ療法として、レゴラフェニブ、TAS102 が臨床導入され、予後の改善が期待された。

4. 膵・胆道がん

多施設共同研究として FGFR2 融合遺伝子陽性胆道癌の臨床病理学的、分子生物学的特徴を明らかにするための前向き観察研究、膵がん切除症例に対する術後補助化学療法としての S-1 療法の至適投与期間に関するランダム化第Ⅱ相試験、膵がんにおける腫瘍の発生と進展に関与する遺伝子の役割を行っている。単施設研究として、切除不能胆道がんに対する塩酸ゲムシタビン・シスプラチン・S-1 併用化学療法を実施している。

「点検・評価」

1. 教育

卒前教育は、臨床医学講義、テュートリアル、臨床実習などを行っている。当科が担当する内容が広範に及ぶため、講義は講師以上の教員が担当し、臨床実習は医局員全員で担当している。系統講義は医学を基礎から理解してもらうことに努め、国家試験出題基準に沿った内容を盛り込むように統一した。テュートリアルでは、問題解決型能力を育成することと、自主学習能力を高めることを主眼に、学生主体で進化した。臨床実習は、問題解決型の能力を養うことを目指し、プレゼンテーション能力の育成にも時間をかけた。また系統的に学習できるよう、クルズスにも時間を割き充実した内容になるように努めた。

卒後教育では、初期臨床研修医と専門修得コース (レジデント) の教育を行った。初期臨床研修は、医師として必要な内科的な全身管理ができるような教育を心掛けた。特に当科の特性を活かし、抗がん薬投与後の支持療法、感染症の管理について指導した。レジデントには、造血幹細胞移植など難易度の高い診療を担当してもらい、また終末期医療を通じて切れ目のない緩和医療を学んでもらった。

カンファレンスでは自分が担当している患者のプレゼンテーションを行い、臨床的な問題点、今後の治療方針について議論できる能力を養った。また貴重な症例は内科学会、日本血液学会の地方会、医局会で症例発表するようにし、プレゼンテーション能力が向上するように教育している。

2. 研究

1) 臨床研究

当教室は積極的に多施設共同研究に参加している。主な研究グループは JALSG、日本臨床腫瘍研究グループ (JCOG)、関東造血幹細胞移植共同研究グループ (KSGCT)、日本造血細胞移植学会の Working Group である。当科での臨床業績が認められて、白血病の研究グループである JALSG では、研究グループの幹事や臨床試験の研究代表者に当科のメンバーが選ばれている。

造血幹細胞移植の多施設共同研究は、KSGCT と日本造血細胞移植学会の Working Group で行っている。KSGCT では、造血幹細胞移植の前向き研究と後ろ向き研究を行っており、当科も積極的に参加している。当科が研究代表者を務めている研究もあり、研究を通じて当院の造血幹細胞移植の activity と質の向上に役立っている。また日本造血細胞移植学会の Working Group では、全国の施設が日本造

血細胞学会に登録した膨大な移植データを疾患別に解析している。当科からも幾つかの Working Group に参加しているが、成人急性骨髄性白血病の Working Group (成人 AML-WG) では責任者を務めており、他施設のメンバーが解析した研究の指導を行っている。2016年度の研究成果は、世界的に評価の高い journal へ多数掲載された。

固形腫瘍では関連各科と共同して臨床研究が推進されている。乳がん、食道がん、胃がん、大腸がんを中心に有機的展開が図られているものの、人員的要因から全病院の要求には応えられていない。主たる国内外での学会発表、論文発表はなされているが、さらに相互交流を進めるとともに、基礎分野との協同の持続的活性化が必要である。

2) 基礎研究

関連する講座との共同研究が推し進められている。研究結果の幾つかは論文化された。海外留学から帰局した教室員らが骨髄腫や腫瘍免疫を中心として共同研究を遂行している。これらの研究成果の論文化を積極的に行う必要がある。また留学生が帰国後も継続研究可能な新たな研究基盤拡張も課題である。

研究業績

I. 原著論文

- 1) Aoki J, Seo S, Kanamori H, Tanaka M, Fukuda T, Onizuka M, Kobayashi N, Kondo T, Sawa M, Uchida N, Iwato K, Ichinohe T, Atsuta Y, Yano S, Takami A. Impact of low-dose TBI on outcomes of reduced intensity conditioning allogeneic hematopoietic stem cell transplantation for AML. *Bone Marrow Transplant* 2016; 51(4) : 604-6.
- 2) Aoki J, Kanamori H, Tanaka M, Yamasaki S, Fukuda T, Ogawa H, Iwato K, Ohashi K, Okumura H, Onizuka M, Maesako Y, Teshima T, Kobayashi N, Morishima Y, Hirokawa M, Atsuta Y, Yano S, Takami A. Impact of age on outcomes of allogeneic hematopoietic stem cell transplantation with reduced intensity conditioning in elderly patients with acute myeloid leukemia. *Am J Hematol* 2016; 91(3) : 302-7.
- 3) Kurosawa S, Yamaguchi H, Yamaguchi T, Fukunaga K, Yui S, Wakita S, Kanamori H, Usuki K, Uoshima N, Yanada M, Shono K, Ueki T, Mizuno I, Yano S, Takeuchi J, Kanda J, Okamura H, Inamoto Y, Inokuchi K, Fukuda T. Decision analysis of postremission therapy in cytogenetically intermediate-risk acute myeloid leukemia: the impact of FLT3 internal tandem duplication, nucleophosmin, and CCAAT/enhancer binding protein alpha. *Biol Blood Marrow Transplant* 2016; 22(6) : 1125-32.
- 4) Yanada M, Yano S, Kanamori H, Gotoh M, Emi N, Watakabe K, Kurokawa M, Nishikawa A, Mori T, Tomita N, Murata M, Hashimoto H, Henzan H, Kanda Y, Sawa M, Kohno A, Atsuta Y, Ichinohe T, Takami A. Autologous hematopoietic cell transplantation for acute promyelocytic leukemia in second complete remission: outcomes before and after the introduction of arsenic trioxide. *Leuk Lymphoma* 2017; 58(5) : 1061-7. Epub 2016 Oct 5.
- 5) Suzuki K, Yano S, Nishiwaki K, Sano K, Shimada T, Yahagi Y, Ogasawara Y, Sugiyama K, Takahara S, Saito T, Kasama K, Minami J, Yokoyama H, Kamiyama Y, Katsube A, Masuoka H, Katori M, Machishima T, Ouchi A, Dobashi N, Kaito K, Usui N, Aiba K. Clinical significance of granule-containing myeloma cells in patients with newly diagnosed multiple myeloma. *Cancer Med* 2016; 5(11) : 3051-8.
- 6) Hagihara M, Iriyama N, Yoshida C, Wakita H, Chiba S, Okamoto S, Kawakami K, Takezako N, Kumagai T, Inokuchi K, Ohyashiki K, Taguchi J, Yano S, Igarashi T, Kouzai Y, Morita S, Sakamoto J, Sakamaki H. Association of pleural effusion with an early molecular response in patients with newly diagnosed chronic-phase chronic myeloid leukemia receiving dasatinib: results of a D-First study. *Oncol Rep* 2016; 36(5) : 2976-82.
- 7) Takagi S, Masuoka K, Uchida N, Kurokawa M, Nakamae H, Imada K, Iwato K, Ichinohe T, Atsuta Y, Takami A, Yano S. Allogeneic hematopoietic cell transplantation for leukemic transformation preceded by Philadelphia chromosome-negative myeloproliferative neoplasms: a nationwide survey by the adult acute myeloid leukemia working group of the Japan Society for Hematopoietic Cell Transplantation. *Biol Blood Marrow Transplant* 2016; 22(12) : 2208-13.
- 8) Yamasaki S, Hirakawa A, Aoki J, Uchida N, Fukuda T, Ogawa H, Ohashi K, Kondo T, Eto T, Kanamori H, Okumura H, Iwato K, Ichinohe T, Kanda J, Onizuka M, Kuwatsuka Y, Yanada M, Atsuta Y, Takami A, Yano S. Role of reduced-intensity conditioning allogeneic hematopoietic cell transplantation in older patients with de novo acute myeloid leukemia. *Ann Hematol* 2017; 96(2) : 289-97.
- 9) Konuma T, Kondo T, Yamashita T, Uchida N, Fukuda T, Ozawa Y, Ohashi K, Ogawa H, Kato C, Takahashi S, Kanamori H, Eto T, Nakaseko C, Kohno A, Ichinohe T, Atsuta Y, Takami A, Yano S; Adult Acute Myeloid Leukemia Working Group of the Ja-

- pan Society for Hematopoietic Cell Transplantation (JSHCT). Outcome of allogeneic hematopoietic stem cell transplantation in adult patients with acute myeloid leukemia harboring trisomy 8. *Ann Hematol* 2017; 96(3) : 469-78.
- 10) Yanada M, Kurosawa S, Kobayashi T, Ozawa Y, Kanamori H, Kobayashi N, Sawa M, Nakamae H, Uchida N, Hashimoto H, Fukuda T, Hirokawa M, Atsuta Y, Yano S. Reduced-intensity conditioning allogeneic hematopoietic cell transplantation for younger patients with acute myeloid leukemia : a registry-based study. *Bone Marrow Transplant* 2017; 52(6) : 818-24. Epub 2017 Jan 23.
- 11) Mashima K, Yano S, Yokoyama H, Saito T, Machishima T, Shimada T, Yahagi Y, Takahara S, Sugiyama K, Ogasawara Y, Minami J, Kamiyama Y, Katsube A, Suzuki K, Ohshima S, Yamada H, Usui N, Aiba K. Epstein-Barr virus-associated lymphoproliferative disorder with encephalitis following anti-thymocyte globulin for aplastic anemia resolved with rituximab therapy : a case report and literature review. *Intern Med* 2017; 56(6) : 701-6. Epub 2017 Mar 17.
- 12) Hayashi K, Nagasaki E, Kan S, Ito M, Kamata Y, Homma S, Aiba K. Gemcitabine enhances rituximab-mediated complement-dependent cytotoxicity to B cell lymphoma by CD20 upregulation. *Cancer Sci* 2016; 107(5) : 682-9.
- 13) Shirai Y, Shiba H, Iwase R, Haruki K, Fujiwara Y, Furukawa K, Uwagawa T, Ohashi T, Yanaga K. Dual inhibition of nuclear factor kappa-B and Mdm2 enhance the antitumor effect of radiation therapy for pancreatic cancer. *Cancer Lett* 2016; 370(2) : 177-84.
- 14) Yang S, He P, Wang J, Schetter A, Tang W, Funamizu N, Yanaga K, Uwagawa T, Satoskar AR, Gaeckle J, Bernhardt M, Ghadimi BM, Gaida MM, Bergmann F, Werner J, Ried T, Hanna N, Alexander HR, Hussain SP. A novel MIF signaling pathway drives the malignant character of pancreatic cancer by targeting NR3C2. *Cancer Res* 2016; 76(13) : 3838-50.
- 15) Horiuchi T, Uwagawa T, Shirai Y, Saito N, Iwase R, Haruki K, Shiba H, Ohashi T, Yanaga K. New treatment strategy with nuclear factor- κ B inhibitor for pancreatic cancer. *J Surg Res* 2016; 206(1) : 1-8.
- 16) Fukushima R, Kobayashi Y, Fukuhara S, Miyamoto K, Munakata W, Maruyama D, Kim SW, Watanabe T, Taniguchi H, Maeshima A, Tobinai K. A retrospective analysis of combination chemotherapy consisting cyclophosphamide, vincristine, prednisolone and procarbazine (C-MOPP) for pretreated aggressive non-Hodgkin lymphoma. *J Chemother* 2016; 28(2) : 116-22.
- 17) Ishii H, Konuma T, Kato S, Oiwa-Monna M, Tojo A, Takahashi S. Impact of hematogones on the long-term outcomes of single-unit cord blood transplantation for adult patients. *Leuk Lymphoma* 2017; 58(1) : 118-26.
- 18) 西脇嘉一. 第4章：管理・治療 慢性骨髄性白血病 6. チロシンキナーゼ阻害剤：副作用マネージメント. 木村文彦（防衛医科大学校）編. 最新医学別冊：診断と治療のABC：慢性骨髄性白血病・骨髄増殖性腫瘍. 大阪：最新医学社，2016. p.131-40.
- 19) Miyasaka N, Miura O, Kawaguchi T, Arima N, Morishita E, Usuki K, Morita Y, Nishiwaki K, Ninomiya H, Gotoh A, Imashuku S, Urabe A, Shichishima T, Nishimura J, Kanakura Y. Pregnancy outcomes of patients with paroxysmal nocturnal hemoglobinuria treated with eculizumab : a Japanese experience and updated review. *Int J Hematol* 2016; 103(6) : 703-12.
- 20) Kawamura K, Ikeda T, Hagiwara S, Mori T, Shinagawa A, Nishiwaki K, Ohashi K, Kubonishi S, Fukuda T, Ito T, Tomita N, Ichinohe T, Kato K, Morishima Y, Atsuta Y, Sunami K, Kanda Y. Tandem autologous versus autologous/allogeneic transplantation for multiple myeloma : propensity score analysis. *Leuk Lymphoma* 2016; 57(9) : 2077-83.
- 21) Ninomiya H, Obara N, Chiba S, Usuki K, Nishiwaki K, Matsumura I, Shichishima T, Okamoto S, Nishimura JI, Ohyashiki K, Nakao S, Ando K, Kanda Y, Kawaguchi T, Nakakuma H, Harada D, Akiyama H, Kinoshita T, Ozawa K, Omine M, Kanakura Y. Interim analysis of post-marketing surveillance of eculizumab for paroxysmal nocturnal hemoglobinuria in Japan. *Int J Hematol* 2016; 104(5) : 548-58.

II. 総 説

- 1) 小笠原洋治. 【腎機能を悪化させない日常診療】血液疾患における腎機能のみかたと対策. 成人病と生活習慣病 2016; 46(3) : 387-92.
- 2) 矢野真吾. VI. 治療各論 8. 再発・難治性 ALL. 薄井紀子編. 急性リンパ性白血病 (ALL) の基礎と臨床. 東京：医薬ジャーナル社，2016. p.180-93.
- 3) 薄井紀子. 【急性骨髄性白血病診療の最前線】ゲムツズマブ・オゾガマイシンの有用性および投与上の注意点. 血液内科 2016; 72(2) : 200-5.
- 4) 薄井紀子. Current Organ Topis Hematologic Malignancies/Pediatric Malignancies 血液・リンパ系腫瘍再発・難治性造血器腫瘍の治療 - 新規・追加承認薬とその位置付け - 総括. 癌と化療 2016; 43(5) :

528-9.

- 5) 薄井紀子. 臨床研究で求められる倫理とは 倫理指針をふまえて. 日小児アレルギー会誌 2016; 30(2): 198-205.
- 6) 薄井紀子. 【白血病学(上)-最新の基礎, 臨床研究-】白血病の予後因子 急性白血病の予後因子 急性リンパ芽球性白血病. 日臨 2016; 74(増刊 8 白血病学(上)): 469-74.
- 7) 土橋史明. 【変わりゆくリンパ腫の診断と治療-一般外来での初発症状から最新治療まで】リンパ腫の合併症・化学療法の合併症腫瘍崩壊症候群. 内科 2016; 117(6): 1343-6.
- 8) 矢萩裕一. 【白血病学(下)-最新の基礎, 臨床研究-】白血病の治療 各論(化学療法と分子標的療法) 再発・難治急性リンパ芽球性白血病. 日臨 2016; 74(増刊 10 白血病学(下)): 143-50.
- 9) 矢萩裕一. 【不定愁訴症候群とどう向き合うか】慢性骨髄性白血病と不定愁訴 慢性疾患化した慢性骨髄性白血病とアドヒアランス. 成人病と生活習慣病, 2016; 46(10): 1321-5.
- 10) 大場理恵, 薄井紀子. 急性骨髄性白血病に対するアザシチジンの効果. 血液内科 2016; 72(3): 392-8.

Ⅲ. 学会発表

- 1) 大島さやか, 南 次郎, 矢野真吾, 町島智人, 島田貴, 小笠原洋治, 杉山勝紀, 高原 忍, 齋藤 健, 勝部敦史, 神山祐太郎, 郡司匡弘, 仲野 彩, 服部大樹, 石見公瑠美, 薄井紀子, 相羽恵介. Tocilizumab 後に血栓症を併発したがステロイド併用下で再投与し得た Castleman 病の 1 例. 第 5 回日本血液学会関東甲信越地方会. 新潟, 7 月.
- 2) Gunji T, Mashima K, Takahashi N, Inoue Y, Kusano Y, Nitta H, Ueda K, Nishimura N, Yokoyama M, Terui Y, Hatake K. Lack of CD56 expression in newly diagnosed multiple myeloma is poor prognostic factor in new agent era. 第 14 回日本臨床腫瘍学会学術集会. 神戸, 7 月.
- 3) Ouchi A, Sano K, Kawashima M, Yokoyama H, Katori M, Masuoka S, Nishiwaki K, Aiba K. Impact of cytogenetics characters of myelodysplastic syndrome (MDS) treated with azacitidine. 第 14 回日本臨床腫瘍学会学術集会. 神戸, 7 月.
- 4) Minami J, Yano S, Saito T, Yokoyama H, Machishima T, Shimada T, Yahagi Y, Takahara S, Sugiyama K, Ogasawara Y, Kamiyama Y, Katsube A, Suzuki K, Gunji T, Nakano A, Ohshima S, Hattori D, Ishimi I, Dobashi N, Usui N, Aiba K. Once-daily tacrolimus reveals a similar efficacy compared with twice-daily tacrolimus in all-SCT. 第 78 回日本血液学会学術集会. 横浜, 10 月.
- 5) Machishima T, Yano S, Saito T, Minami J, Yokoyama H, Shimada T, Yahagi Y, Sugiyama K, Ogasawara Y, Takahara S, Kasama K, Katsube A, Kamiyama Y, Suzuki K, Gunji T, Ouchi A, Ohshima S, Hattori D, Dobashi N, Usui N, Aiba K. Philadelphia chromosome is not a prognostic factor after allogeneic hematopoietic stem cell transplantation for the patients with acute lymphoblastic leukemia in the era of tyrosine kinase inhibitors. 第 78 回日本血液学会学術集会. 横浜, 10 月.
- 6) Ouchi A, Machishima T, Katori M, Sano K, Masuoka H, Nakano M, Nishiwaki K, Aiba K. Composite mantle cell and diffuse large B cell lymphoma resulted in a poor prognosis. 第 78 回日本血液学会学術集会. 横浜, 10 月.
- 7) Hattori D, Saito T, Yano S, Minami J, Yokoyama H, Machishima T, Shimada T, Yahagi Y, Sugiyama K, Ogasawara Y, Takahara S, Katsube A, Kamiyama Y, Suzuki K, Gunji T, Nakano A, Ohshima S, Ishimi K, Dobashi N, Usui N, Aiba K. HLA-haplo-identical transplantation for acute leukemia relapse after allogeneic HSCT. 第 78 回日本血液学会学術集会. 横浜, 10 月.
- 8) Ishimi K, Yano S, Saito T, Machishima T, Shimada T, Yahagi Y, Ogasawara Y, Sugiyama K, Takahara S, Minami J, Yokoyama H, Kamiyama Y, Katsube A, Suzuki K, Dobashi N, Usui N, Aiba K. A retrospective analysis of salvage therapy of CNS invasion of relapsed non-Hodgkin's lymphoma. 第 78 回日本血液学会学術集会. 横浜, 10 月.
- 9) Ito Y, Ohba R, Hosoba R, Fukushima R, Shiota Y, Dobashi N, Usui N. Thrombocytosis with fever caused by pegfilgrastim in an elderly patients with follicular lymphoma. 第 78 回日本血液学会学術集会. 横浜, 10 月.
- 10) Hosoba R, Dobashi N, Yamauchi H, Ito Y, Fukushima R, Ohba R, Shiota Y, Usui N, Aiba K. Two cases of organizing pneumonia complicated with malignant lymphoma. 第 78 回日本血液学会学術集会. 横浜, 10 月.
- 11) Uwagawa T, Sakamoto T, Nakaseko Y, Takano Y, Furukawa K, Kanehira S, Onda S, Gocho T, Shiba H, Arakawa Y, Aiba K, Yanaga Y. Initial report of phase II study of adjuvant chemotherapy of gemcitabine with nafamostat mesilate for pancreatic cancer. ACS (American College of Surgeon) 102nd Annual Clinical Congress. Washington, D.C., Oct.
- 12) Miyazaki Y, Sakura T, Yanada M, Takase K, Imai K, Dobashi N, Aoyama Y, Sawa M, Itonaga H, Usuki

- K, Honda S, Ohtake S, Kiyoi H, Ohnishi K, Kobayashi Y, Naoe T. Clinical features and prognosis of unselected patients with AML and RAEB-2: JALSG CS07 study. 第78回日本血液学会学術集会. 横浜, 10月.
- 13) Nannya Y, ayoshida K, Kataoka K, Nagata Y, Yoshizato T, Kiguchi T, Dobashi N, Usuki K, Naoe T, Kobayashi Y, Kiyoi H, Chiba S, Asou N, Miyazaki Y, Tanaka H, Chiba K, Shiraishi Y, Miyano S, Ogawa S. Landscape of MDS genomes as revealed by whole genome sequencing. 第78回日本血液学会学術集会. 横浜, 10月.
- 14) Takeda J, Yoshida K, Makishima H, Nannya Y, Shiozawa Y, Suzuki H, Shiraishi Y, Okuno Y, Chiba K, Miyao S, Sanada M, Kiguchi T, Dobashi N, Usuki K, Chiba S, Asou N, Miyazaki Y, Naoe T, Kiyoi H, Kobayashi Y, Ogawa S. Clonal evolution following azacitidine therapy in patients with high-risk myelodysplastic Syndromes. 第78回日本血液学会学術集会. 横浜, 10月.
- 15) Ishiyama K, Ohtake S, Miyamura K, Kiyoi H, Miyazaki Y, Kobayashi Y, Usui N, Fujita H, Asou N, Miyawaki S, Naoe T. Response to remission induction therapy can predict the prognosis in de novo AML patients. 第78回日本血液学会学術集会. 横浜, 10月.
- 16) Harada K, Doki N, Hagino T, Miyawaki S, Ohtake S, Kiyoi H, Miyazaki Y, Fujita H, Usui N, Okumura H, Miyamura K, Nakaseko C, Fujieda A, Nagai T, Yamase T, Sakamaki H, Ohnishi K, Naoe T, Ohno R, Ohashi K. Clinical impact of body-mass index on the outcome of Japanese patients with acute myeloid leukemia. Response to remission induction therapy can predict the prognosis in de novo AML patients. 第78回日本血液学会学術集会. 横浜, 10月.
- 17) 薄井紀子. (G-CSF 適正使用ガイドライン改訂にかかるコンセンサスマーケティング「G-CSF 適正使用ガイドライン改訂に向けての問題点」) 造血器腫瘍1) 骨髄系腫瘍. 第54回日本癌治療学会学術集会. 横浜, 10月.
- 18) 薄井紀子. (G-CSF 適正使用ガイドライン改訂にかかるコンセンサスマーケティング「G-CSF 適正使用ガイドライン改訂に向けての問題点」) アジアにおけるG-CSFの臨床応用と問題点. 第54回日本癌治療学会学術集会. 横浜, 10月.

呼 吸 器 内 科

教授：桑野 和善	呼吸器内科学, 間質性肺炎, COPD
教授：児島 章	呼吸器内科学, 肺癌
准教授：中山 勝敏	呼吸器内科学, COPD, 気管支喘息
准教授：荒屋 潤	呼吸器内科学, 間質性肺炎, COPD
講師：高木 正道	呼吸器内科学, 肺癌
講師：斎藤 桂介	呼吸器内科学, 感染症
講師：沼田 尊功	呼吸器内科学
講師：原 弘道	呼吸器内科学

教育・研究概要

I. 教育

かつての日本における呼吸器病学は即ち結核病学であった時代は、肺結核の克服とともに、肺生理学が呼吸器疾患の病態を解明する手段となった。その後、遺伝学、生化学、分子生物学の進歩によって、感染症、肺癌、気管支喘息、慢性閉塞性肺疾患(COPD)、間質性肺炎といった様々な主要な呼吸器疾患の病態解明が飛躍的に進歩した。高齢化社会の到来に伴い、加齢と呼吸器疾患の病態に関する研究が飛躍的に進んでいる。呼吸器疾患は多彩であり、その多くが高齢化とともに急増しているため、その病態解明と根治的な治療を確立するためには、腫瘍学、感染症学、免疫学、分子生物学など基礎医学を駆使した研究が必要である。若手の医師が将来の呼吸器病学を担うことができるように成長するには、実力ある指導医が、臨床と研究の両面において若手を育てる意思を持って教育する必要がある。

当科のカリキュラムは、内科認定医の取得に始まり、呼吸器専門医から呼吸器指導医資格取得できる指導体制と研修システムを確立している。呼吸器疾患は、直接生死に関わる領域であり、気管支鏡、胸腔ドレナージ、人工呼吸器など体得すべき専門的技術も多い。また、腫瘍学、免疫学、生理学、生化学、分子生物学など基礎知識の習得と、肺癌、アレルギー疾患、COPD、間質性肺炎、感染症などの専門各分野のいずれかのエキスパートとなるために、それぞれの分野の学会の専門医取得はもちろん、大学院、留学などによる研究を奨励している。当科の教育目標は、臨床と研究を通じて、幅広く内科学を習得し、呼吸器内科学を専門とする実力ある内科医を育成することで社会に貢献することを目標としている。